

Title	東独における宗教改革と農民戦争の研究の現状
Sub Title	The present standard of the study about reformation and peasant war in East Germany
Author	寺尾, 誠
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1962
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.55, No.4 (1962. 4) ,p.411(91)- 422(102)
JaLC DOI	10.14991/001.19620401-0091
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19620401-0091

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

彼の妻がそれを引受けた。十七世紀の末近くになって、この傾向はいよいよ促進された。これまでと違い、領主で在地する者は非常な例外でしかなかった。むしろ土地を離れている場合が普通である。

領主は在地しない。かかる領主にとって貨幣経済の滲透は非常な打撃であった。そうしたなかで彼は自己の地位の維持をはからなければならなかった。領主は土地を貸借関係のなかに組込むことによってそれが達成できると信じた。領主制の変容はもはや明白である。領主は村を離れていた。にもかかわらず土地に対する権利を強力に保持し続け、さらにこの権利を行使することで土地を取得し、土地の賃貸者になった。そのことにより彼は土地との関係を一段と強固なものにしていった。土地をめぐる貸借関係は急速に普及した。メテリはこの過程の所産にほかならなかった。

十六世紀の封建危機が直接の原因となり、またその後の貨幣経済の進行のなかで、領主層の交替は明白である。新領主は同時に土地の賃貸者をも兼ねることによって自己の再生を考えていた。領主制の変容とはこの過程の進行にほかならない。従ってそれは所領経営

のため領主がよぎなくされた姿勢でしかなかった。領主はこの二重の機能を支障なく果すべく、その一切を第三者の肩にゆだねるにいたった。ここにフェルミエ・ジェネラルが登場する。所領経営の複雑化するなかで、彼は高度の法律的知識を要求された。従って公証人はフェルミエ・ジェネラルのほとんど唯一の有資格者であった。もともとフェルミエ・ジェネラルは領主の代理でしかなかった。しかし彼はおいおい経済的実力を蓄積できた。今や彼は領主の代理たるに甘んじない。彼はその蓄積を投じてメテリを取得するにいたった。彼は一途にメテリを狙い、これによって土地の賃貸者の地位にまで上昇した。しかし彼の土地所有には何の後継もない。その意味では、土地所有の後継に封建諸力を持っていた領主の場合と違う。土地所有でここに異質の二つのものが並存することになった。一方は純粹に所有関係である。他方は封建関係の維持のための手段としての土地所有であった。フランス革命はこの両者の角逐の場にほかならなかったのである。

東独における宗教改革と 農民戦争の研究の現状

寺尾 誠

一九五二年にソ連の歴史学者スミリンによって「トーマス・ミュンツァーの国民的宗教改革と大農民戦争」が発表され、ドイツにおける宗教改革と農民戦争は市民革命としての歴史的評価をえたのであるが、その後これに関してはソ連歴史学界において一九五七、八年にこの評価をめぐる論争が展開された。ソ連におけるこのような動向に対し、当のドイツにおける研究は、どのような状態にあるのか、本稿は一九六〇年一月二日―二三日にかけて東ドイツのヴェニゲローデで開催されたドイツ歴史家協会中世史部会の討論を通じて、東独におけるこの問題の研究の現状を調べ、その目的とする。

な行為は宗教改革と農民戦争において頂点に達した。エンゲルスは「ドイツ農民戦争」(一八五〇)で、一五一七年から一五二五年に到るこれらの事件はドイツにおける初期市民革命としてとらえられることを示した。

この会議は第一テーマ「十四世紀の都市における人民運動」、第二テーマ「ドイツにおける初期市民革命」の二つのテーマで討論が行われたが、ここでは第二テーマに限定することとする。最初にこのテーマの問題提起者の発題を簡単に紹介しよう。

二、初期市民革命の時期区分。
(a) 階級闘争の上昇期(一四七六―一五一七) フス派の影響の下にニイクラスハウゼンのファイファーの一揆に始まり、ブントシュエー、アルメン・コンラッド等の一揆を経て宗教改革の開始に到る。
(b) 初期市民革命の頂点(一五一七―一五二五、六) ルターによるロマ教会への抗議開始から農民戦争の敗北に到る。
(c) 階級闘争の下降期(一五二六―一五三五) ツヴィングリ(スイス)やガイスマイヤー(ティロル)の没落を経て一五三五年のミュンスターにおける再洗礼派の籠城事件に到る。

A スタインメッツの問題提起

一、ドイツにおける上昇しつつあるブルジョアジーの最初の偉大

三、一五三五年―一五五五年の間に諸侯の宗教改革の最終的勝利が確定する。社会革命の敗北後の最も重要な抗争は、諸侯と王の間

東独における宗教改革と農民戦争の研究の現状

において行われたが、諸侯相互の敵対性はここにおいても止揚されない。

四、ルターについての伝説の長期にわたる圧倒的な支配は、トーマス・ミュンツァーの人間像及び再洗礼派の役割を不明としてきたばかりか、ルター、ミュンツァーの活躍したテューリンゲン・ザクセン地方以外に初期市民革命の第二の中心地としてアルプス地方（北部スイス、ティロル等）が存在していたこともかくされてしまう。五、これらの二つの中心地は多くの努力にも拘らず結合せずに終る。

六、当時のドイツの経済状態は工業生産の著しい上昇に特徴づけられる。この発展は多くの技術の発明、特に新しい鉱物の発見によりひきおこされ、遠隔地商業の拡大によって倍加されたのである。封建的生産様式の没落と資本主義的要素及び形式の導入はすでに一四世紀から開始され、一五世紀の半ば以来著しくなったのである。そして依然として支配的であった商業・高利貸資本の他に、西南及び中部ドイツにおいてすでに剰余価値の占取による資本形成が進んでいた。生産への資本の侵入により資本主義的生産様式が、産業資本としてすでに鉱山業、鋳鉄業、繊維産業において成立していた。いわゆる問屋制度 Verlagsystem は不完全な、未発達初期資本制的生産様式である。この下において初期資本制的搾取が行われ、これにより「プロレタリアートの先駆」 Vorproletariat といわれる多くの平民の層が発生するのである。

七、産業資本に対して農業及びツントの手工業生産はますます

停滞しつつあった。商品、貨幣関係の侵入は、農民への封建的搾取の強化を結果した。

八、ドイツでは本源的蓄積はまだ僅かしか行われていない。従って生産者の生産手段の分離も僅かしか進行していない。

九、初期市民革命前夜のドイツの経済的・政治的状态は矛盾を激化させる方向に働き合っていた。但し地方的分裂は多くの聖、俗の領邦権力に結果し、中央権力は「大ハンザ」の増大する権力に対して完全に無力化しつつあった。

一〇、政治的に分裂し、無力であったドイツは、教会制度の精神的、道徳的没落と反比例して増大する財政的要求になやむ法王庁の搾取の対象となっていた。

一一、階級闘争の激化は社会の物質的生産力の発展と生産関係の矛盾の爆発の結果である。本源的蓄積が進み、資本制生産様式が最も普及している鉱山業、鋳鉄業、繊維産業等の発展している先進地帯が初期市民革命の中心舞台となったのである。しかし当時の生産様式における矛盾は非封建的な諸階層を一つの戦線に統一しようところまでいっていなかったのである。資本主義を準備したとしても封建制に奉仕していた商業資本は強化しつつあった諸侯権力と相対立するのではなくして、それと協力したのである。

一二、封建的分裂、ロマ教会による搾取、中央権力の没落に反対する闘いにおいて、これらの状態の廃絶を求め、ドイツの統一を要求する強力な国民意識が発生する。これと関連して中央集権権力への強い志向があらわれるが、これは種々の階級及び集団によって担

われているにせよ、最も非国民的な諸侯という勢力に一致して反対するものである。

一三、異端の運動 Ketzerbewegung は初期市民革命を準備した。都市の市民的異端は教会の経済的、政治的地位に反対したが、農民的、平民的異端は共同体及び市民社会における原始キリスト教的平等関係の回復、すなわち財産の平等性に到る市民的平等の実際的回復を要求した。

一四、イデオロギーの分野ではルネッサンス期の人文主義が前準備の役割を果たしたのである。すなわち一五世紀の半ば以来の人文主義の前進は中世的、封建的世界像の破壊に大きな影響を与えた。それは特に教会の世俗化への批判を促進し、市民的思考や研究への道を拓いた。（言語学、歴史学、地理学、民俗学、文学等の市民的科学の創造への貢献。）しかし人文主義者達は国民大衆に無理解であり、古典ラテン語を母国語とし、人文主義を純粋の学者の仕事に限定していたのである。

一五、同時代のドイツの芸術の発展は、グリューネヴァルトやデューラー等の巨匠をうみだした。偉大なドイツの芸術家が国民大衆の側に立ったのも決して偶然のことではない。

一六、「革命は全国家的危機（搾取者も被搾取者も含む）なしには不可能である。」（レーニン）このような危機が一六世紀初頭の神聖ロマ帝国ドイツをおそったのである。

一七、帝国の最上層部には名目的にはロマの、実質的にはハプスブルグ家の王制が存在していたが、それは決して国民的王朝ではな

東独における宗教改革と農民戦争の研究の現状

く、国民的ドイツの利害と無関係の道を政治的に歩んでいったのである。

一八、一六世紀の領邦諸侯の権力すなわち領邦君主制は中央集権に対する、また自己の領邦等族つまり貴族、都市、教会に対する闘いにおいて勝利をおさめた。一五世紀以来の都市と農村の階級闘争の激化は確固とした国家形態の創設を必然化したのである。しかもその国家組織の発展は諸侯の小国家の基盤において行われ、かくして諸侯は中央権力への優位を保持したのである。そして諸侯の完全な自立化への志向は領邦教会の出現ともなった。

一九、かかるドイツの政治的状态は多くの教会国家つまり教会団体に属し、これにより治められている領邦の存在により複雑となるのである。

二〇、カトリック保守的な立場の人々は、ドイツにおいてもはや以前のような仕方ではその支配を主張することはできなかった。二一、領邦君主制の上昇はまた必然的に騎士制度の没落と以前には独立していた諸都市の自立性の喪失を伴ったのである。

二二、一六世紀初頭の市民階級は後世のブルジョアジーのような階級としての統一性を示しておらず、また資本主義的階級への発展途上にあつたといえよう。都市貴族の代表的人物は領邦君主の階層に上昇していた（特にフッガー家とウエルザー家）。中小市民層はまだツント的なものに縛られ、その代表者は封建的關係に従属し、自己解放とそれ以上の発展の意志も能力も持ち合わせなかったのである。ドイツの分裂の存続と商業路の位置の変化、とくに国内市場

の未発達は、広範な、自覚した市民的、資本家的階級の形成を阻止した。宮廷用の生産(奢侈品生産、軍隊制度、城砦建設、その他建築等)が国内市場むけの生産より優位に立っていた。

二三、初期市民革命の最初の段階は、ルターの免罪符に反対する九十五カ条の宣言によって開始された国民運動であり、そこにおいてドイツの歴史上始めて凡ゆる階級が中産的市民層の指導の下に法王庁への闘いに団結したのである。

二四、ヴァルトブルグ城においてルターは新約聖書の翻訳を行ったのであるが、彼は聖書の翻訳者としてばかりでなく、パンフレットや弁駁書の著者としても、讚美歌の作詞者としても偉大な貢献をなしとげ、統一的な標準ドイツ語の文書及び文学の言語の普及および完成にも力を尽した。

二五、ルターの宗教改革は市民階級から要望された「安い」*billige* 教会を創設した。それは法王庁との関係を絶ち、教会関係の小王国やその諸権利を廃止し、修道院を解散し、その僧侶達を市民生活に復帰せしめた。それはまた聖人崇拜の制度や教会の罰則その他の制度をも廃止した。

二六、ヴォルムスの国会終了後初期市民革命の第二の段階が開始される。すなわちそこでは四つの宗教的、政治的立場が形成されたのであり、これと共に統一的国民的な反ロマの運動は終るのである。

(a) 保守的、カトリックの立場 これは既存の諸関係の維持に利益を感じるすべての分子を含む。帝国権力や教会関係の

諸侯、高僧から世俗の諸侯の一部や富裕な貴族、そして一部の都市貴族がこれに入る。

(b) 市民的、穏和なルターの立場 これは反対派の富裕な層、特に中部、北部ドイツのそれを含み、さらに下級貴族の大半、市民層、世俗諸侯のかなりの部分も含んでいた。

(c) 市民的、急進派 これはツヴィングリの指導の下にツェリヒやベルンの富裕市民を含み、ルターの市民的要求と人文主義的志向とを融合させてはいたが、共和的、実践的態度において市民的穏和派とは根本的に異なっていたのである。

(d) 農民と平民の革命的運動 これは全ドイツをおおい、ミュンツァーとガイスマイヤーにその要求は代弁されている。

二七、これらすべての党派において、分裂そのものより、その党派の形成過程が問題である。(a)と(b)の立場は統一されたものでなく、内部矛盾や対立を含んでいた。市民的急進派や革命的反対派が敗退していったのは、彼らの敵対者の不統一を利用することを知っていた諸侯達の階級同盟によって始めて可能であった。

二八、統一的、革命的戦線の崩壊はツィテンベルグの運動に示されてはいたが、さらにそれは騎士層の叛乱が国民大衆との闘争から独立して行われたことにまずあらわれた。

二九、トーマス・ミュンツァーは早くからルターと分離し、独自の教説をツヴィガウ、プラハ等で発展させ、ドイツにおける国民的宗教改革 *Völkerverformung* の必然的表現を創りだした。彼の政治的計画は領邦体制の絶滅と国民への権力の移行の二点であり、国民

的宗教改革の完成であった。しかもこの変革は農民の平民的な立場だけでなく、ドイツ史の国民的政策の頂点を示していた。

三〇、大農民戦争の過程で二つの分派が形成された。穏和派は二カ条の綱領とヴァイガントのハイルブロン改革案に代表され、過激派はミュンツァーとガイスマイヤーの影響の下にあった。

この左右両翼の中間にフランケン農民の「農民結集大会のため」という徽が位置している。

三一、農民戦争に象徴されるドイツ初期市民革命は下から統一的国民国家をつくり出す国民大衆の最初の試みを示した。しかしこの目標の達成には地方性や組織性の克服及び同盟関係の確立をもたらしうる統一的な目的意識的指導が必要であった。そして本来市民革命において反封建闘争の先頭に立つはずの市民階級が動かなかったことは、多くの指導者の試みにも拘らずこの目的意識的指導を十分なものとなしえなかったのである。農民自身の政治的訓練の不足はこの弱点を倍加した。

三二、初期市民革命の敗北は、領邦君主制の勝利をもたらしたが、これは当時の封建体制の危機を救うための唯一の道であった。

三三、農民戦争の敗北にさいしルターはむごい役割を演じた。彼はツィテンベルグの農民の蜂起に直面すると農民の弾圧を主張し、エラスムスやツヴィングリとの関係さえも絶つたのである。こうして市民的宗教改革はルター派諸侯の小王国の正確な思想的表現となり終った。

三四、ミュンツァーの教説は行動に起ち上った革命的農民と平民

東独における宗教改革と農民戦争の研究の現状

に影響を与えた。彼の処刑によって初期市民革命はその卓越した指導者を失ったのであるが、その後十年余りも信奉者達は彼らの理想の実現に努力した。過激派のもう一人の指導者であるガイスマイヤーはミュンツァーより市民的であった。そして時代を超越したミュンツァーの空想的な構想は、労働者の思想の先駆としてドイツの国民的発展の正しい方向を指示していた。

さてスタインメッツは以上の初期市民革命に関するテーゼと共に補足的な説明を行っている。^(注5) その説明において彼は最新の西ドイツにおけるこの時期の研究を取り上げ、その観念的歴史分析に批判を加えると共に、彼の「初期市民革命」という独自の概念規定についての説明を行っている。彼は宗教改革と農民戦争を市民革命としてとらえるソ連の歴史学者に基本的に賛成しつつも、なお宗教改革と農民戦争とイギリス、フランスの古典的市民革命を区別し前者を特に「初期市民革命」と名づけるのである。すなわち一六・七世紀はヨーロッパ中で市民革命の前提及びその諸力の成熟の時期であり、この成熟の第一歩は農民の反封建闘争に示される。一六世紀初頭のドイツは一方で市民革命の前提条件をそなえつつあったが、他方でそれを阻止する条件、特に封建制廃止の政治的条件たる中央集権国家の絶対主義体制の成立が欠けていることに致命的弱点を示していた。宗教改革と農民戦争、特に後者における農民を中心とする反封建闘争はこの弱点を克服し国民国家を建設して行く方向を示したのであり、ブルジョア革命の時期の第一歩として評価しうるのである。

る。したがって市民革命の条件が完全に成熟し、市民革命が完成されたわけではなく、この意味で古典的市民革命と区別されるが、それは単なるブルジョア革命の先駆的形態としてではなく、それ自身市民革命の性格をもつところの「初期市民革命」なのである。

B 発題をめぐる討論

さてこのようなスタインメッツの問題提起をめぐってどのような論争がこの会議で展開されたのであろうか。我々は残念ながら、スタインメッツ自身承認しているように、この会議においては論争らしい議論は行われなかったと判断せざるをえない。本来討論がスタインメッツの提出した基本問題を中心に行われるべきであるのに、殆どの発言が極めて個別的な視野からのそれに限られていたのである。スタインメッツの「初期市民革命論」に真向うから取り組んだものは、僅かにエックハルト・ミュラー・メルテンスとイングリット・ミッテンツヴァイの二人であり、この内前者が注目すべき発言をしているにすぎない。

一、ミュラー・メルテンスによればスタインメッツがソ連における議論を發展させて封建制の破壊による統一国民国家の形成をめざす初期市民革命なる新しい性格規定をうちだしたことは意義があるが、同時にスタインメッツの規定は不十分さを伴っている。そしてその不十分さは彼が初期市民革命の直接の目的を封建制廃止にしているため、古典的市民革命との区別が明らかにならぬことにあるとされている。一体一六世紀のドイツは一七世紀のイギリスのよう

な、ブルジョアジーへの政治権力の移行を可能とする経済的、社会的条件があつたのであろうか。たしかに一四、五世紀のドイツは経済的發展が著しく鉱山業、鑛鉄業、金属加工業、繊維産業等において資本制的生産様式が生成すると共に、地域的分業も前進した。しかし一六世紀当時のドイツの市民階級はまだ市民革命の推進主体となりうる主体的、客体的条件をもたず、階級としては極めて未成熟なものに留っていた。すなわち彼ら自身封建的土地所有者であり、その利害関係は封建体制と一致していたのであり、宗教改革と農民戦争の直面した課題は決して封建制の完全な廃止および権力の移行ではなかつたのである。エンゲルス自身の規定もよく検討してみると、宗教改革とドイツ農民戦争をヨーロッパ・ブルジョアジーの三大決戦の第一段階と考える彼の主張は、決してこの第一段階そのものに封建制廃止の課題をおわせるものではなく、封建的国家の枠内での市民革命の第一段階の勝利として位置づけることを意味するのである。すなわちマルクスやエンゲルスはかの三大決戦を個々の国の市民革命としてとらえたというよりは、むしろヨーロッパのブルジョアジーの封建制への決戦として、すぐれてヨーロッパ的な市民革命の發展段階としてとらえていたのである。エンゲルスによれば市民革命の發展段階は次のようになる。第一段階の課題はヨーロッパ封建制の精神的支柱であつたロマ教会の支配を打破することにあつた。これは当然宗教的外装の革命、宗教改革としてあらわれざるをえなかつた。第二段階はブルジョアジーがすでに支配階級の重要部分となつているが、まだ全一支配を獲得することが出来ず上昇す

るブルジョアジーと封建的土地所有者の妥協の結果一定の政治的変革が行われるのであり、一七世紀の英国革命がこれである。第三段階は封建制の完全な廃止が課題であり、革命はすでに宗教的外装を完全に脱ぎ捨てた政治革命としてあらわれる。一八世紀のフランス革命こそこれである。

ところで中央集権国家体制は封建支配の最後の段階でありながら、本源の蓄積を促進し、統一的国内市場を形成するという進歩的性格をもっているのであつて、かかる体制の欠如していたドイツにおいては、単にロマ教会への反抗が下からの宗教改革として展開しただけでなく、これと呼応して中央集権的国民国家を形成することが緊急の課題となつていたのであり、農民を中心とした反封建闘争の方向もこの課題(市民革命の第二段階)の成就にあつたといふべきであらう。そしてこの成就には革命的闘争と王権の同盟が必要であつたであらう。ではこのような課題は果して当時のドイツにおいて実現可能であつたらうか。ミュラー・メルテンスは可能であつたという結論に傾きつつも、決定的回答はむしろ史料による検証と理論的な解明の統一によるとする。

このミュラー・メルテンスの注目すべき発言はスタインメッツの問題提起同様にこの会議においては余りかえりみられずに終り、僅かにスタインメッツの総括においてミュラー・メルテンスが中央集権国家の成立の可能性に肯定的であり、とくにこれを王権との同盟においてとらえようとしていることに対し、現実はそのようなことが不可能であつたことを示していると指摘しているだけであ

東独における宗教改革と農民戦争の研究の現状

二、この他政治史の分野では「ハイルブロン帝国改革案」の意義を扱ったフォグラート、^(注10)「ズイグムンディの改革案」に初期市民革命の開始をみるシュトラウベの^(注11)二人の発言があるが、いずれもスタインメッツの初期市民革命論を是認した上での議論である。

三、市民革命論と関係してかなり重要な内容をもつと考えられる発言は経済史の分野で行われている。一つはカールハインツ・ブラシュケの「ドイツの経済的統一性か経済的的地方性か?」^(注12)である。彼は一六世紀当時のザクセン地方において商品経済がどのような發展段階にあつたかについて問題提起を試みているのである。すなわち政治的分裂が直ちに経済的分裂を意味するという通説に対して彼は当時のドイツはすでに都市と農村の間の局地的交換から地方間の商品交換への發展が行われていたと考えるのである。そしてこのような形での中世的な狭い経済領域の自足性の打破は特に地方的分業の進展と共に実現していったのであるが、特に次の三つの需給関係のアンバランスが注目される。第一に消費及び生産のための大量の商品への需要のある地域であつて、このうち特に原料への需要は大であり、このための遠隔地商業は当時の工業生産の前提となつてい

た。第二に農業及び工業生産物の剰余のある地方の発生があげられる。そして第三に遠隔地商業によつてのみ充たされうる奢侈品への需要がある。さてブラシュケはこのような需給関係のアンバランスに基いた地方間の交換についてザクセン地方を中心としてその実態を分析し、消費財産業、金属産業においては地方間の分業、結合が

みられることを指摘する。そしてこれは交通網の整理及び信用機構の発展をも促がすのであるが、他方ではこのような経済的結合を阻止する要因も強固に存在していたのであって、特に政治的領邦の分裂、これに基く関税や禁制の存在が重要な意味をもっていた。ここに経済的な発展と政治的にはそれを阻止する分裂という極めて特殊な矛盾が一六世紀当時のドイツには存在していたのである。

四、さてブラッシュケの発言が主に地方間の分業及び商業という角度から当時のドイツ経済を分析しようとしたとすれば、ゲルハルト・ハイツはこれを地域内における社会的分業の展開の変化としてとらえようとしており、ブラッシュケの立論を補う形となっている。すなわちハイツによれば一四・五世紀の地域内分業の特徴は都市のソフツの手工業に対し農村工業の発展に求められる。特にこれは繊維産業における特殊な都市と農村の対立としてあらわれ、農村工業は商業資本の生産への積極的介入の結果でもあった。同時に農村工業のその後の進展は以下にあげる諸事情の下で阻止されることとなる。第一に農業生産の分裂・分散と商業資本そのものの弱体性があげられなくてはならない。第二に農民戦争の敗北による再版農奴制の導入は農村における経済的発展を阻止したのである。第三にこのことの当然の結果として領邦国家の政策は明白に封建的諸勢力(貴族及びソフツの市民)の補強を目的とした。そして農村工業の進展から新しい生産関係の生成を積極的に主張するクンツェの見解(注14)をケムニッツの漂白業を中心として批判し、一方における商業資本の農村進出とこれに対応した漂白迄行方農村織元の広範な生成及び

仲買人的企業家の発生等の現象を認めると共に、産業の再封建化 Refeudalisierung の事実にもっと注目する必要を説いている。そしてこのような観点から鉱山業、金属加工業、ガラス工業等の諸産業についての研究を推進することを提唱している。

五、さてこの二人の経済史に関する注目すべき発言の他にこの分野においてはカール・シュタインミュラーのツヴィカウの織物産業についての発言及びヨハネス・シルダウアーのバルト海地方の都市平民層の分析及びデイトリヒ・レーシュのミュールハウゼンの農民の階層分化の分析がある。

六、この他に収録されている発言は主に農民戦争の前後の運動に関する様々な分析である。その第一のグループは農民戦争当時の中部ドイツ及びバルト海地方の都市における運動及び諸要求を扱ったものであり、ゲルハルト・ギェンター、ヘルムート・ミュラー、エリッヒ・ドンネルトの三人があげられる。第二には農民戦争後に前面にあらわれてくる再洗礼派の運動を思想的・社会的に扱ったもので、ゲルハルト・チェビッツ、ハンナ・ケディッツ、ギェンター・ミュルフォルトの三人である。第三には農民戦争の卓越した指導者であるトーマス・ミュンツァーとミカエル・ガイスマイヤーの二人に関するもので、前者についてはヘルマン・ゲーブケとゲルハルト・ブレンドラー、後者についてはヨセフ・マケックが発言している。第四に、若干の個別分析がある。これには農民戦争後の農民への処罰についてのゲブハルト・ファルク、中部ドイツの警察に関するエリッヒ・ノイス、史料刊行についてのヘンリク・ベッカー、

フィリップ・メランヒトンについてのヴァルター・ツェルナー等の発言が含まれている。(注21)

七、さて以上簡単に紹介した東独のドイツ歴史家協会の中世史部会の会議における「ドイツ初期市民革命」についての討論は、発題者スタインメッツの総括をもって終わっている。スタインメッツはここでまず東独歴史学界の停滞を指摘し、これを克服して行くことこそこの会議の目標であったとし、彼自身の「初期市民革命論」の立場から個々の報告、発言に対する簡単な論評を試みている。しかしこれは彼自身認めている討論全体の偶然的・恣意的性格の故に、注目すべき論評とはなっていない。その上で彼は今後の方向については、(一)ソ連歴史学会との協働のうちに歴史理論の究明、特に宗教改革と農民戦争の性格規定を明らかにすること、(二)資本の本源的蓄積とくに資本主義発生の形態に関する究明、(三)反封建勢力についての個別研究の前進による反封建闘争の主體的エネルギーの正確な評価、(四)時期的にも、地域的にも初期市民革命の過程の正確な分析、とくに反封建闘争の中心点の確定、(五)ドイツ人文主義についての研究、(六)再洗礼派の運動についての研究、の諸課題を明らかにした。このような方向についてはスタインメッツは冒頭の問題提起の中で、計画的、体系的な研究体制の確立と共に、史料に対する徹底的研究、非マルクス主義的歴史学への批判の前進、理論的究明によって始めて可能となるとしている。

C 結 語

東独における宗教改革と農民戦争の研究の現状

さて我々はこの会議の討論を通じ、最近の東独歴史学界の現状の一端にふれることが出来たのであるが、これ迄の紹介においても容易にみとれるようにその水準は決して高いとはいえない。若干の人々を除いては理論と歴史分析は分離してしまっており、このため歴史分析そのものも極めて無味乾燥なものとなると共に、歴史分析を有効にするような歴史理論の創造に対しても無関心と教条主義が支配しているようにみえる。そして若干のすぐれた問題提起を行った人々も、このような一般的傾向から完全に自由であるとはいえず、一面においてすぐれた問題提起も夫々に弱点を有しており、このため相互の問題提起の真剣な組み合わせによる、生産的な論争が一つとして行われぬ結果となったのである。このような意味での問題としては第一に市民革命論があげられよう。我々が個別的な歴史事象をとりあげて、これを市民革命との関係において考察する場合、その個別的な事象そのものも一般性と個別性のいずれをも正しくとらえなくてはならない。そしてこのためには、まず様々な市民革命の類型から極く抽象的な市民革命の一般規定を理念像として創造し、さらにこの一般規定に個別的な事象を直接あてはめるのではなく、この一般規定を市民革命の諸類型と関連づけることにより、市民革命の特殊類型をつくりだし、その上で個別的な事象を分析するという手続が必要となる。勿論このような理論考察は、あくまで歴史的現実を素材としてたえず豊富化されて始めてその有効性が保証されるのであるが、同時にその理論的考察における一般規定と特殊規定の二段階の立体構造が重要であり、従来この区別が明確でないために

理論の有効性が十分發揮されなかつた嫌いがある。^(注23)そして市民革命論に即していうならば、スタインメツツの提出した初期市民革命論が、果して以上のような方法的厳密さに基いて構成されているかどうかが問題となるのである。すなわち彼においては初期市民革命は古典的革命との対比においてとらえられているが、何よりも先ず必要なことは第一に市民革命の一般規定に基き、ヨーロッパにおける市民革命の特殊類型を明らかにすることである。そしてこの問題の究明は古典的市民革命をなしたイギリス、フランスとそれをなしとげえずしてなしくずしに近代化していったドイツとの相違を明確にするであろう。すなわち市民革命の類型化の課題は封建制から資本制社会への移行という歴史的過程についての一般的规定(ヨーロッパを主な素材としつつそれを抽象した)に基き、ヨーロッパの特殊的规定を明確とし(プロシヤ型とアメリカ型のいわゆる二つの道の究明を含む)、その上でドイツにおいてはどのような個性があらわれているかという問題の究明によって始めて解決されるのである。これは段階規定の立体的把握であつて、例えばミュラー・メルテンスがエンゲルスによりつつ市民革命の進行過程の三段階という把握を試みているのは、この意味で注目すべき立論を含んでいる。しかし彼においても以上のような立体的把握が十分なされているわけではないから、その主張は何故ドイツにおいては他の国と異り第一段階が社会的激突としてあらわれざるをえなかつたかというドイツの個性が明確とならないのである。

さて以上の二重の一般的・特殊的规定の上で宗教改革と農民戦争

の正確な位置づけを行うならば、それは市民革命前夜の反封建闘争としてヨーロッパ全体にもドイツ自身にも大きな意味をもつたにも拘らず、それ自身を市民革命として規定をすることは無理であろう。何故ならば市民革命はまず政治革命であり、権力の移行が課題であり、第二に封建権力を打倒したブルジョア(本質においてブルジョア的な)権力の任務はブルジョアの發展の促進に本源的蓄積の推進であるが、宗教改革と農民戦争はこの点においてまだ市民革命の条件を完全に整えていたとはいえないのである。勿論、封建ドイツ社会の種々の個別的條件のために他国と比べ二世紀近く遅れざるをえなかつた農民戦争が、国際的條件と相まって下からの宗教改革と結合し、極めて独自の社会的激動と化し、特に宗教改革はイギリスにおける市民革命の前提条件となつたのであるが、それ自身は市民革命としてはあらわれず、一八四八年になつて始めて(たとい挫折したとしても)市民革命が展開されたとみるべきであろう。このように初期市民革命論は根本的検討を必要とするのであるが、これと同時に先に紹介した経済史の分野においても社会的分業及び市場構造論・流通過程及び生産過程における商業資本の役割等についても立体的な理論的考察とそれに基く史料分析がもっと厳密に行われ必要がある。フランスやドイツ等の注目すべき主張もそれによつてもっと深化され、科学的内容を獲得することとなる。そして主体的立場の推進と共に、西独の実証史学の成果ももっと積極的に攝取される必要があるのである。

註
(一) M. M. Smirin, Die Volksreformation des Thomas Münzer und der große Bauernkrieg, 1952.

(二) この論争は宗教改革と農民戦争を市民革命と見做すことと、その間、エンゲルス、メルテンス等とこれに反対のチャトウマン、カヤ等が参加してゐる。メルテンスは前掲書(他)に Deutschland vor der Reformation, 1955. & Wirtschaftlicher Aufschwung und revolutionäre Bewegung in Deutschland im Zeitalter der Reformation. In: „Sowjetwissenschaft“ Gesellschaftswissenschaftl. Beiträge 2 (1958) S. 243 ff. 等の著書に於て、A. D. Epstein, Reformation und Bauernkrieg in Deutschland als erste bürgerliche Revolution. In: „Sowjetwissenschaft“, Vergleich. Beiträge, 3 (1958) S. 363 ff. J. M. Grigorjan, Zur Frage nach dem Entwicklungsstand der Wirtschaft nach dem Charakter der Reformation und des Bauernkrieges in Deutschland, 1958. O. G. Tschalkowskaja, Über den Charakter der Reformation und des Bauernkrieges in Deutschland. In: „Sowjetwissenschaft“, Vergleich. Beiträge 6 (1957).

(三) Deutsche Historiker-Gesellschaft, Tagung der Sektion Mediävistik der deutschen Historiker-Gesellschaft vom 21-23. I. 1960. in Wienerode, Bd. 1. Städtische Volksbewegungen im 14. Jahrhundert, Bd. 2. Die frühbürgerliche Revolution in Deutschland. 2. Bd. 2. & F. R. D. 2. 卷十。

(四) この標題のドイツ文は、この Zeitschrift für Geschichtswissenschaft, Heft 1. VIII. Jahrgang, 1960. SS. 113-124. 巻十の第 1 号に於て。

東独における宗教改革と農民戦争の研究の現状

5. M. Steinmetz, Die frühbürgerliche Revolution in Deutschland (1476-1555). Thesen.

(5) M. Steinmetz, Problem der frühbürgerlichen Revolution in Deutschland in der ersten Hälfte des 16. Jahrhunderts, in F. R. D. SS. 17-52.

(6) M. Steinmetz, Nachwort, in F. R. D. S. 296.

(7) E. Müller-Wertens, Zu den Aufgaben der frühbürgerlichen Revolution in Deutschland und der Rolle des Königtums, in F. R. D. SS. 81-90.
(8) I. Mitzenzwei, Bemerkungen zum Charakter vom Reformation und Bauernkrieg in Deutschland, in F. R. D. SS. 101-107.

(9) F. Engels, Die Entwicklung des Sozialismus von der Utopie zur Wissenschaft, Einleitung zur englischen Ausgabe, 1892.

(10) G. Vogler, Zur Entstehung und Bedeutung des Heilbrunner Programms, in F. R. D. SS. 116-125.

(11) M. Straube, Die Reformation Sigismundi als Ausdruck der revolutionären Bewegungen im 15. Jahrhundert, in F. R. D. SS. 108-115.

(12) K. Blaschke, Deutsche Wirtschaftseinheit oder Wirtschaftspartikularismus?, in F. R. D. SS. 53-58.

(13) G. Heitz, Zu einigen wirtschaftsgeschichtlichen Fragen der frühbürgerlichen Revolution, in F. R. D. SS. 59-63.

(14) A. Kunze, Der Frühkapitalismus in Chemnitz, 1958.

(15) K. Steinmüller, Zur Lage der Zwickauer Tuchmacherei zwischen 1470. und 1550, in F. R. D. SS. 220-224.

(16) J. Schildhauer, Das Anwachsen der plebejischen Schicht der Sta-

- überfölkung im Ostseengebiet und deren Rolle in der frühbürgerlichen Revolution, in F. R. D. SS. 73-80.
- (17) D. Loesche, Zur Lage der Bauern im Gebiet der ehemaligen freien Reichstadt Mühlhausen Th. zur Zeit des Bauernkrieges, in F. R. D. 64-72.
- (18) G. Günther, Der mühlhäuser Rezeß vom 3. Juli 1523, in F. R. D. SS. 167-183; H. Müller, Die Forderungen der thüringischen Städte im Bauernkrieg, in F. R. D. SS. 138-144; E. Donnerl, Bemerkungen zur Frage der Reformation und der Volksbewegungen in Livland, in F. R. D. SS. 145-151.
- (19) G. Zschibitz, Die Stellung der Täuferbewegungen im Spannungsbogen der deutschen frühbürgerlichen Revolution, in F. R. D. SS. 152-162; H. Köditz, Zur Ideologie der Täuferbewegung im Mühlhausen in Thüringen, in F. R. D. SS. 184-207; G. Mühlfordt, Deutsche Täufer in östlichen Länder, in F. R. D. SS. 234-294.
- (20) H. Goebke, Thomas Münzer-familienhistorisch und zeitgeschichtlich gesehen, in F. R. D. SS. 91-100. G. Brendler, Eine Exkursion zu den Wirkungsstätten Thomas Münzers in Thüringen, in F. R. D. SS. 228-233; J. Macek, Resumé des noch un veröffentlichten Buches über Michael Gaismaier, in F. R. D. SS. 208-219.
- (21) G. Falk, Strafregister, unausgeschöpfte Quellen zur Geschichte des Bauernkrieges 1525 in Thüringen, in F. R. D. SS. 126-133; E. Neuß, Über städtische Polizeipersonale in Mitteldeutschland während des Reformationsjahrhunderts, in F. R. D. SS. 134-137; H. Becker, Ausgaben frührevolutionärer Quellen, in F. R. D. SS. 168-183; W. Zoller, Philipp Melancton und der Bauernkrieg, in F. R. D. SS. 225-227.
- (22) M. Steinmetz, Nachwort, in F. R. D. SS. 295-306; 各号の巻末に「この号の簡単な解説」の Zeitschrift für Geschichts-wissenschaft, 1960, Heft 4, SS. 964-974. 又 Adolf Laube 以下に述べられる。彼等は本稿の「か」の第二テーマより第一テーマの方が成果が「あ」たるといふ。
- (23) これについては拙稿「歴史科学方法論」慶応義塾経済学会経済学年報四号所収参照。
- (24) 拙稿「ドイツ農民戦争の歴史的意義」三田学会誌五十巻三号、六号、十二号、五十一巻六号所収参照。

書評

O. D. ダンカン他著

『統計地理学』

Otis Dudley Duncan, Ray P. Cuzzort and Beverley Duncan:
Statistical Geography, Problems in Analyzing Areal Data,
1961. (The Free Press of Glencoe, Illinois, pp.191)

高橋潤二郎

最近、地域経済の問題とからんで、経済活動のエリアルな側面に対する関心が増大しつつあることは、既に、機会あるごとに指摘してきたが、この動向は単に経済学に限らず他の分野、社会学、政治学においてもみられるものである。従来、地理学固有の研究対象として専ら自然と人間の相互作用という説明原理をもって考察されてきた地表上の人間活動は、最近では、より広範な人間活動の空間的ないし地理的秩序に関する考察として、脚光をあびつつあるといつてよからう。だが、こうした考察は、一方において、それが一定エリアル内の人間活動を対象とすることからいって、必然的に「エリアル」なる概念に対するインターディシプリナリな関心をよびおこし、他方、たとえそれが各分野固有の研究対象を考察する場合であっても、人間活動のエリアルな側面の追求という共通課題があることからいって、目的意識はともかくも方法的には各分野を通じてある程度共通する問題が生じてくることが予想される。最近各

分野にみられる実態調査の対象ないし研究の場としての「地域」の重視は前者の一つのあらわれといつてよからう。いうまでもなく従来「地域」概念を最もリファインし現実把握の上でも積極的な貢献を示したのは地理学の研究者であつたと思われるが、社会学におけるロミュニティの研究、経済学における空間経済の研究、更に、最近では政治学においてさえ権力の地域的分割の問題が活発な議論を生み、夫々大なる成果をあげている。これら各分野の地域概念は夫々相違しているが、共通にみられる一つの基本的問題は、地理学研究者によって非常に長期にわたり論議され、しかし、依然として結論のでない、地域の限界決定の指標は何か、又、その指標に見合うべくいかなる技術が採用されるべきか、ということである。又、後者の最も端的な事例は、最近の立地論、人口論、都市社会学等の文献にみられる観察単位のエリアルな分布ないし結合関係の測定であつて、これらいずれの分野でもトータル・ポピュレーションの中にその部分をなすサブ・ポピュレーションのエリアルな集中・集積の度合が測定されなければならないわけであるが、ここで採用されている測定方法は、フーパーの立地係数、フローレンスの地域集中度、又、人口比重、更に、一部の都市社会学の研究に用いられている segregation index にしても、ほぼ同一であるといつてよい。

要するに、これら種々の現象のエリアルな側面の究明、地域にまつわつて生ずる諸問題の解決は現在各分野の研究者によって相互に独立に専攻されているが、これらがいくつかの共通な方法論上の問題をかかえていることが指摘され得るのである。